慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ペティー労働価値説の一考察（１）
Sub Title	On Petty's labour theory of value
Author	茅野, 泰夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.1 (1961. 1) ,p.14(14)- 27(27)
JaLC DOI	10.14991/001.19610101-0014
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19610101-0014

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ペティー労働価値説の一考察 (1)

茅野泰夫

経済思想史上過渡期の思想家[註1]といわれ、ホッブズの徒でありまた多分の影響[註2]をうけたといわれるサー・ウィリアム・ペティー (Sir William Petty) (1623-87) は、イギリスにおける二つの革命、市民革命と名誉革命の時期に渉って経済学上の研究著作活動を続けた。その主著『租税貢納論』(A Treatise on Taxes and Contributions, London, 1662) において価値理論を展開している。そこでは研究の関心を生産にそして生産過程にむけることにより、剰余価値のアイディアを捉え、「古典政治経済学の嚆矢」とも「近代政治経済学の建設者[註3]」ともいわれた如く、その中で副次的にではあるが労働価値思想を展開しているのである。『アイルランドの政治的解剖』(The Political Anatomy of Ireland, London, 1671-2) 以後の著作には労働の価値による価値の説明、時には支配労働説的考えの展開があるが、『租税貢納論』にもそれらの萌芽的考えがないわけではないが、まがりなりにも、一応は投下労働説的考えが貫ぬかれている。本稿においては彼の労働価値説を第一期著作[註4]を中心にして考察してみたいと思う。

先ず本題に入る前に彼の価値理論につき概観してみよう。

(註1) E. Heimann, History of Economic Doctrines, an introduction to economic theory, 1945, p. 36. 喜田村浩訳「経済学説史」六二頁。

(註2) Edmond Fitzmaurice, The Life of Sir William Petty, 1895, p. 188. そこではペティーはホッブズの理論を実際に適用したとする。
Charles Henry Hull, The Economic Writings of Sir William Petty, 1899, vol. I. Introduction, p. lxii.
そこでは経済的著作の中にもホッブズの影響があるが、その影響は主として経済学者としてのペティーというよりかむしろ政治家としてのペティーに対してであるとしている。

(註3) Theorien über den Mehrwert ,zur Kritik der politischen Ökonomie", Herausgegaben von Karl Kautzky, Band 1, S. I. でのくられている。新版である K. Маркс, Теории прибавочной стоимости. Часть 1, Москва, 1954. стр. 333. K. Marx, Theorien über den Mehrwert, Dietz Verlag Berlin 1956, S. 318. ではこの言葉はなく表題に労働価値説の萌芽と記してある。

(註4) Hull, Petty's Place in Economic Theory (Quarterly Journal of Economics, vol. XIV, 1900. で行なっている一期の経済学上の著作として、A Treatise of Taxes and Contributions, Written and printed 1662.(「租税貢納論」)。Verbum Sapienti, Written in 1665, Printed in 1695. (「賢者には一言をもって足る」) をさす。

一

ペティーの労働価値論を考察するに当り、まず彼の使用価値観を見よう。富の真実の源泉を求めた彼の有名な富に関する命題「土地が富の母であるように、労働は富の父であり、その能動的要素 (active principle) である[註1]」を想起しよう。この命題にて、ペティーが使用価値としての富の源泉を土地 (自然) と労働に求め、しかも労働をその能動的要因とした点が重要である。ただ此処で注意しなければならぬのは「富」を使用価値として、また、その源泉として土地と労働に求める見解は、その命題自身としては、社会的形態に無関係な富の内容についての認識である。かかる点のみを問題にした論者は既にペティーの師であるトマス・ホッブズ (Thomas Hobbes) により、彼の主著『レヴァイアサン』(Leviathan) で述べられているところなのである[註2]。

しかるに、ペティーにおいては右の如き単に社会の諸形態に関係のない富の一般認識にとどまらず、さらに進んで近世資本制社会の経済関係の解明を目指す経済学上の認識を果しているのである。というのは彼にあっては後述する如く商品の価値をその生産に要する労働時間に帰せしめているからである (厳密にいえば交換価値を労働時間に還元する)。この点において彼は同時代の論者とブルジョア的富の把握において一歩先んじていたわけである。富を考える場合使用価値として把握すると同時にそれがまた交換価値をもっているということを前提とした。そのことは商品を富として把えていたことを意味する。商品を本来の富 (交換価値をもつ使用価値) として把握したことは、いわゆるブリオニストないしマーカンティリストの富に対する見解、すなわち貨幣をもって本来の「富」とする見解に比して格段の前進であった。

ペティーは商品を使用価値つまり資料的富とし、更に労働を現実的労働とし、且使用価値を現実的労働に還元する。「すべての物は二つの自然的単位名称 (natural Denominations) で価値づけらるべきである。すなわちそれは、土地と労働によって、ということである。すなわち、われわれがいわねばならぬのは、一隻の船または一枚の上

衣がこれこれの数量の土地、ならびに他のこれこれの労働に値するということである。そのわけは、船も上衣もともに土地およびそれに投ぜられた人間労働(mens Labours)の創造物であるからだ」[註3]といっている。右のごとく船や上衣の原因としての労働は現実的労働である。すなわち総じて富をつくり出すところの労働（使用価値を創造する労働）は現実的労働すなわち具体的労働なのである。

いままでに見て来たことから当然気付くことは、彼は価値論で労働価値説を提唱しているわけであるが、厳密にいえば、彼の理論は、価値の原因及び尺度として労働のほかに土地を持ち込む二元論たる土地労働理論を展開している。かかる土地労働理論はスミスに至るまでの時期の英国の経済学者にみられる共通の現象であった。[註4]それは使用価値視点に立つ限りではそれ自体正しい（富の源泉また尺度として、使用価値＝富生産には自然も役だつという意味において）。それが交換価値の源泉また尺度と考えられると其処に混乱を生ずる（いわゆる使用価値視点と価値視点の混同の問題）。それは使用価値を追加するも交換価値を追加しない。交換価値の源泉としての抽象的人間的労働ではなく使用価値をつくり出すかぎりの労働、素材的富の一源泉としての具体的労働だからである。ペティーの時代にあっては、農業人口と土地所有の圧倒のもとに、後述の如く、地代が剰余価値の主要な形態をなしており、絶対的剰余価値の生産方法が未だ解明把握されず、土地および労働の量的増加によって使用価値と同時に社会的総価値の増加を計るということが手っ取り早い

方法であったのである。土地と労働が、それ自身富と考えられる時に、土地＝労働理論が歴史的社会的根拠として一つの意義をもったのである。

そこで、生産力向上による富の増加は、使用価値＝富の増加であり、相対的剰余価値の増進に違いないが、一方価格の下落を伴うという結果を生ずる。そこで使用価値増加と共に社会の総価値を増加させるのに前述の如く労働ならびに土地の増加ということに着目する。ペティーは労働は人民が増加するにつれて増加する。したがって人民の多少が富を決定するということになる。人口は富であるという命題を取り上げるのである。すなわち彼は「人民が少ないということは真実の貧困である。八百万の人民をもつ国家は、同じ地域に四百万しかいない国よりも二倍以上富んでいる。なぜなら、統治者というものは非常に経費がかかるものであり、それと同じ数のもので、少ない人民に対しても、多くの人民に対しても、ほとんど同様にその役割を果すことができるからである。[註5]」といっている。人民の多少が富を決定するという考え方からしてペティーの労働尊重観の中にはすでに、労働の担い手としての人口、人間の労働力という非人格的要因を考え、進んで国民的富の原動力としての労働生産力ということを洞察していたと考えられる。今この点については取上げない。それは彼の晩年の著作においてかかる思想が散見しえられるからである。[註6]ただここで指摘しうるのは、『租税貢納論』中でこの問題に示唆をあたえる論述として、労働の増加という観点から刑

罰を論じた彼の発言においてである。すなわち、

「ここでわれわれは、『土地が富の母であるように、労働は富の父でありその能動的要因である。』というわれわれの見解の結果として想起さるべきことは、国家はその成員の殺傷もしくは投獄により同時に国家自身をも処罰することにほかならないのだ。[註7]」更につづいて、「以上に述べたことから、資産家でも殺人罪を犯した場合、その手を焼かれる位なら、その財産の中の一部分を支払わせた方がよくはないだろうか。[註8]」更に次節で「支払能力のない窃盗といえども、死刑に処せられる位なら、むしろ奴隷として処罰された方がよい、ということのどこが悪いのであろうか。かれらが奴隷になれば、体力が耐えうる限り強制的に働かされ、しかも安くあげられるだろう。のみならず、こうすることによって公共社会には、二人の人間が加わることになりこそすれ、一人が奪われることにはならない。そこでもしイングランドが人民不足であるならば、現存するよりも多くの者を生みだすことのつぎにたいせつなのは、現存する者をして、現に働いている者の二倍だけ働かせる、換言すれば、ある者を奴隷にすることであると私は言いたい。[註9]」と述べている点にその思想の片鱗が見られるのである。

（註1）William Petty, A Treatise of Taxes and Contributions, 1662, Chap. X. 10, Writings, vol. I, P. 68. 大内兵衛、松川七郎訳「租税貢納論」二一九頁。

（註2）Thomas Hobbes, Leviathan, 1651, Part II. Chap. XXIV., The English Works of Thomas Hobbes of Malmesbury; now first collected and edited by Sir William Molesworth, Bart., p. 232.

「財貨の豊富ということについていえば、それは自然により制限をうけており、われわれの共同の母の乳房たる土地と海とから成立ち、神が通常人類に惜気なく与え給うか、あるいは労働にかえて売り給うた。

動物や、野菜や、鉱物から成るこの栄養物(Nutriment)について見ると、神は、地球の表面に或は近くに、それらのものをばわれわれの前に惜げもなく置いている。故に必要とされるのはそれらを受取る労働(labour)と勤勉(industry)だけである。それ故に豊富ということは、神の恩恵についで、単に人々の労働と勤勉に依存するのである」とホッブズは述べている。ホッブズはここに引用した第二四章で彼の経済論を展開している。

（註3）W. Petty, ibid., chap. IV. 18, p. 44. 邦訳七九頁。

（註4）E.A.J. Johnson, Predecessors of Adam Smith, The growth of British Economic Thought, 1937, p. 243.

「ペティーが労働をば『富の父であり能動的要因』であり土地を『富の母』と名附けた時には彼はラティマー(Latimer)からスチュアート(Steuart)までのイギリスの諸文献に一貫している教義をば簡潔にのべているのである。」

（註5） W. Petty, ibid., chap. III. 12. 8, p. 34. 邦訳六三頁。
（註6） W. Petty, Another Essays in Political Arithmetik, writings, vol. II, p. 473.
「製造業によりえられる利得は、製造業がそれ自体より大きくよりよければよいほどより大である。というのは、非常に大きな都市では、製造業はおたがいに生みあい、そして各製造業はできるだけおおくの部分に分たれ、それによって各職人の仕事は単純で容易となるであろうからである。たとえば、懐中時計の製造において、もし一人が歯車をつくり、一人が発条をつくり、一人が文字板を刻み、また他の一人がケースをつくるならば、全部の仕事が、ある一人でしあげられるよりも時計はよりすぐれて、廉価であろう。そして、われわれはまた、すべての住民がほとんど一産業についている都市や大都市の市街においては、それらの場所に特有な物品が他の場所よりよりよく、そして廉価につくられるのをみるのである。」
（註7） W. Petty, A Treatise of Taxes and Contributions, Chap. X. 10, p. 68. 邦訳一一九頁。
（註8） W. Petty, ibid., Chap. X. 11, p. 68. 邦訳一一九頁。
（註9） W. Petty, ibid., Chap. X. 12, pp. 68-69. 邦訳一一九—一二〇頁。

二

次に、ペティーは価値をどのように把握していたかの検討をしよう。一言にいえば、「交換価値を労働時間に還元する」という思想を持っていた。すなわち、彼の『租税貢納論』において、

「もしある人が、一ブッシェルの穀物を生産しうると同じ時間に、銀一オンスをペルー（Peru）の大地のなかからロンドンにもってくることができるとしよう。この場合、一方は他方の自然価格（Natural Price）である。ところが、もし新しい、しかももっと楽な〔採掘が〕できる諸々の鉱山のおかげで、ある人がかつて一オンスを獲得したのと同じ容易さで、銀二オンスを獲得することができるならば、そのときには、他の条件にして等しいかぎり、穀物は一ブッシェルが一〇シリングでも、かつて一ブッシェルが五シリングであったのと同様に安価である、ということになるであろう。」（註1）

ペティーはここで、商品——一ブッシェルの穀物——の自然価格は、同一労働時間によって生産される穀物と貨幣商品銀との相対量によって規定している。すなわち、その商品の生産のために投ぜられた労働時間によって規定した。また、彼は別の箇所で、

「一人の人の銀は、他の人の穀物と等価値（equal value）に評価されねばならない。すなわち一方はおそらく二十オンス、他方は二十ブッシェルであろうが、このことから、この穀物一ブッシェルの価格は銀一オンスであるという結果になる。」（註2）

また、その次の節で、

「百人の人をして十年間穀物を生産させ、同数の人をして同期間銀を生産させるがよい。私は言う、銀の純所収（neat proceed）は穀物の全純所収の価格であり、その一方のものの同じ部分は他方のものの同じ部分の価格である。」（註3）

以上三つの引用はペティーの労働価値説を示すものである。これらから理解されることは銀一オンスと穀物一ブッシェルとが等交換比率であるということである。先の引用から、また、これを等価値だとも考えていた。ここで等価値とは等交換価値のことなのである。（というのは、彼が等労働時間をもって等交換比率を成立させる基礎と考えた上で、この等労働時間は等価値になると考えることにより。）すなわち、等労働時間を媒介として、等交換比率＝等価値＝等交換価値となった。さらに、彼はこのことから進んで、銀一オンスは穀物一ブッシェルの価格だとし、またあるいは、自然価格だとする。そこで結局、交換価値、価格、自然価格が同義に使用されていることになり、価値＝価格＝自然価格という三者を混同する用語上の混同が見られるのである。（註4）

ただここで注意しておかなければならないのは、「自然価格」とペティーがいっている場合に、その「自然価格」というのは、後に古典学派以後の人々によって用いられた意味での「自然価格」と異なった意味で使用せられているものなのである。すなわち、古典学派以後でいう「自然価格」はその中に当然平均利潤を含んだが、ペティーにおいては、後述するごとく「利潤」という観念を有しなかったので、それは古典学派でのように平均利潤を含んだ意味での「自然価格」ではなかった。彼が「自然的」というのは社会的事情によりなんら制約をうけないという意味であって、それはまさに、「人為的」（artifical）にまたは「政治的」（political）に変更を受けたものでないという意味においてである。

さらに、ペティーは、「政治価格」「流通価格」（市場価格）について、『租税貢納論』第十四章十七節で、「諸物品の価格を空想的にではなく、実証的に算定する方法」を論じ、生産物の価格を、「自然価格」（Natural Price）、「政治的価格」（Political Price）「真実の流通価格」（true Price Currant）を区別して説明している。

すなわち、

「自然的な高価や廉価は、自然的必需品（necessaries of Nature）の生産に不可欠な人手の多少に依存し、——たとえば、穀物は、一人の人間が六人分の穀物しか生産しえないところより、その人間が十人分の穀物を生産するところの方が安い。——また同時に気候に左右されて人間が必要とされる消費の多少にもよるということ。しかしながら政治的廉価（Political Cheapness）というものは、必要であるすべてのもの以上に、何らかの産業に入りこんでくる過剰なもぐり業者が少数であることに依存する。すなわち、百人の農

夫がなすと同じ仕事をするために、二百人の農夫がいるようなところでは、穀物は二倍だけ高いであろう。そしてこの割合が過剰な支出の割合と合算されるとすると、(すなわち、上述のような騰貴の原因に、二倍の必要な支出が加えられるならば)、自然価格は四倍となって現われるであろう。そしてこの四倍の価格が、自然的根拠に基いて計算された、真実の政治的価格 (Political Price) である。

そしてこの政治的価格が普通の人為的標準銀 (Common artificial Standard Silver) に比例せしめられるならば、求められたもの、すなわち真実の流通価格 (true Price Currant) があたえられるのである。(註5)」

と述べて「自然価格」を基礎として「真実の政治的価格」「真実の流通価格」について論じている。すなわち右引用の「自然的高価や廉価は自然的必需品の生産に不可欠な人手の多少に依存し、……、また同時に人間が必要とされる消費の多少にもよるということ。」でペティーは、「自然価格」を論じているのであるが、要するにそこでは、「自然的必需品」の「価格」は、それの生産に必要とされる労働量によってきまるといっているのである。(註6)

次に、「政治的価格」について、それは、商品の生産をするのに、その生産に必要以上の過剰な人員が入りこんだ場合、それだけ産業の生産物の価格は高くなるとしている。ペティーは、より少ない労働で生産し、その価格を一層やすくできる場合に、それをせず、より多くの労働で生産して価格を高くしているような場合があるが、

それは「自然の状態より過剰な人員が、政治的に生産に従事しているからで「政治的に高価」なのだと考えていた。いずれにしても、政治的価格もまた自然価格と同じように相対的労働量によってきまると考えていた。それ故に「政治的価格」は「自然的基礎の上で計算された、真実の政治価格」といわれたのである。ここでは政治的価格とは「自然的に不可欠な人手」で決まる「自然価格」に対して「過剰な支出」だけ追加され高められた価格であることがわかる。政治的価格もまた自然価格と同じく価値なのである。ここでもまた、ペティーにおける価値と価格の混同が見られる。ところで、商品の政治的価格において、その生産に必要とされる労働量 (＝価値) を考えているとすると、本来の意味での「諸物品の価格」を考えていた彼にとっては、この政治的価格 (＝商品を生産するに必要とする労働量、事実上その価値) は貨幣により表示されなければならない。これは貨幣、すなわちその商品を生産するに要する労働量と等量の労働により生産される貨幣銀に等置することにより行なわれる。かくして得られた商品価格を、自然的基礎で計算された、すなわち労働で計算された「真実の政治的価格」と区別して、貨幣で表示されたものとして「真実の流通価格」と呼んだのである。ここで商品の「価格」は商品の「真実の流通価格」となる。しかるに、商品の真実の流通価格が商品の価格であるということとそのことが、すべての商品が、これに従って売られることには必ずしもならない。ただそれは、商品の真実の流通価格が、商品の価格の平均的な必然的な法

則に関するものであり、実際には商品の価格は、偶然的要因の作用をうけ、この「真実の流通価格」を中心としてそれ以上にまたそれ以下に騰落するものである。ペティーはこのことについて「ほとんどすべての物品は、その代用物や代替物 (Substitutes or Succedanea) をもっているし、そのうえ、ほとんどすべての物は、種々の状態に応ずる用途をもっておりさらに、目新しさ・驚き・高貴な人たちの手本・調査しがたい結果についての評価のために、物の価格は増加したり下落したりもするから、われわれは、上述の永久的諸原因に、これらの偶然的諸原因を加えなければならない。これらのことについて、賢明に予見したりすることにこそ、商人というもののすぐれた点が存するのである。(註7)」と述べていたのである。

さきに見たごとく、「政治的価格」が「真実の流通価格」になるためには通常の人為的標準たる銀に比例してと論ぜられたが、いま人為的基準ということに考察の目を向けなければならない。ペティーはそれについて、「穀物と銀との間の比例は、人為的な価値 (artificial value) のみを示し、自然的価値を示していないこと。なぜならば、この比較は自然的に有用なものと、それ自身としては不必要なものとの比較であるからである。そして、(ついでながら言えば) このことはどうして銀の価格が他の諸物品の価格のように、そう大きく変動せず、また飛躍もしないかということの理由の一部である。(註8)」と述べている点を注意しなければならぬ。ここで、ペティーが「人為的価値」のみを示し「自然的価値」を示さなかったのは、

それによって物の有用性を考えており、「穀物と銀との比例」は、「自然的に有用なるもの、」すなわち使用価値たる穀物と、「それ自身としては不必要なもの、」すなわち、非使用価値たる銀との比較であるから、「自然的な価値」を示さないというのであり、銀が「それ自身として不必要なもの」、すなわち、非使用価値だとされるのは、ペティーが銀を貨幣としてのそれを考えているからであり、銀が貨幣たるのは、それが交換価値を代表して、それ自身として使用価値でないところにあるのだからである。ペティーは、「人為的価値」をば、物の有用性あるいは使用価値と異なり、物の自然的性質に関係ない一つの社会的関係たる交換価値として把握していた。故に、交換価値をば人為的価値として捉え、穀物の価格は、すなわち穀物と貨幣銀との交換比例は、穀物の自然的性質たる使用価値とは無関係な「一つの人為的価値」のみを意味するといったのである。

(註1) W. Petty, ibid., chap. V. 10, pp. 50-51. 邦訳八九—九〇頁。
(註2) W. Petty, ibid., chap. IV. 14, p. 43. 邦訳七七頁。
(註3) W. Petty, ibid., chap. IV. 15, p. 43. 邦訳七七頁。
(註4) またペティーはもう一つ用語上の混同をしている。自然価格を自然価値として使用している場合がこれである。W. Petty, ibid., chap. IV. 18, P. 45. 邦訳八〇頁。
(註5) W. Petty, ibid., chap. XIV. 17, p. 90. 邦訳一五五

頁。

（註6）　ここの文章で、ペティーは前からのべられて来たような労働価値説をのべていると解すべきである。ただ、彼の後の著作「アイルランドの政治的解剖」に見られるような価値思想（労働の価格＝貨銀をもって価格を考える）の萌芽がみられなくもないが、ここではやはり生産に要する労働量によって価格を考えていると すべきである（詳細は後述）。

（註7）　W. Petty, ibid., chap. XIV. 18, p. 90. 邦訳一五六頁。

（註8）　W. Petty, ibid., chap. XIV. 17, pp. 89-90. 邦訳一五四―五頁。

三

ペティーは商品の価値を、商品の生産に要する労働時間によって規定したが、彼の所説にはさらに検討せねばならない別の価値論の萌芽があった。彼は「もし銀が、それで価値づけられる種々の物に対するその比例を異にし、その増減にもとづき、種々の時代によって、価値が異なるとすれば、われわれは金銀の卓越した効用をきずつけることなしに、なにか他の自然的標準および尺度（natural Standards and Measures）を吟味するために努力すべきであろう」[註1]とし、貨幣による商品価値の相対的表示が変動するものであるから、それとは別の「自然的標準および尺度」を求めねばならぬとし、彼は、「土地」および「労働」をこの「自然的標準および尺度」だと考えた。すなわち、「すべての物は、自然的単位名称（natural Denominations）、すなわち土地および労働によって価値づけられねばならない、ということである。すなわち、われわれは一隻の船または一枚の上衣が、これこれの数量の土地、ならびに別のこれこれの数量の労働に値いすると言わねばならない。そのわけは、船も上衣も、ともに土地およびそれに投ぜられた人間の労働（mens Labours）の創造物であるからである。」[註2]と。そこでこの「自然的標準および尺度」はなにを意味するかと、彼の考えているところを類推するとペティーが他のところで「通常の人為的標準銀」（Common artificial Standard Silver）と呼んだ「外在的尺度」たる貨幣に対して、「自然的標準および尺度」（ここでは商品生産に要する「土地」および「労働」）によって、商品の内在的価値尺度を理解していたと思われる。すなわちそれは価値の実体を理解していたと考えられる。この場合、価値尺度として土地および労働があるのは、すべての物が「土地および人間の労働の創造物」だからとした。このことは、ペティーが使用価値の源泉としての土地と労働をばまた同時に価値の源泉と考えたことを示すもので、一般にいわれているごとく、使用価値の源泉と価値の源泉とを混同していたのである。

さらに、ペティーは前の引用した文に続けて「このことが真実であるならば、土地と労働とのあいだに一つの自然的等価関係（a natural par）を発見したことをよろこばねばならない。というのはそれさえできれば、われわれはこれら両者のいずれか一つだけで、両者をもってするのと同じように、またそれ以上十分に、価値を表現することができ、また、その一方を他方に還元することが、ペンスをポンドに還元するように容易・確実となるであろうからである。」[註3]とし、ここでは、土地および労働の二者による価値の実体をそのどちらか一方に一元化することを提案していたのである。しかも、彼は、「世間では、金および銀で、しかし主として後者で、諸物を測定する。というのは、二つの尺度があってはならないし、したがってまた、多数のうちで一層よいものは全体のうちの唯一のものでなければならないからであって、ことばをかえて言えば、一定量目の純銀で諸物を測定するのである。」[註4]として、外在的尺度たる貨幣についてではあったが、価値尺度はただ一つでなければならないことを指摘した。価値の尺度が唯一でなければならぬということは、量的にのみ異なり、質的に同等でなければならない価値の本性に基づくのであり、内在的価値尺度たる価値実体についても勿論そうでなければならない。しからば土地と労働とではどのようにして比較しうるだろうか。ペティーは価値の本性としての質的同等性の問題に気づき、商品の価値、商品を生産するに要する土地および労働、の二つの「自然的標準」または「自然的尺度」を、故に二つの価値実体をそのどちらか一方に還元しようと図ったのである。しかし、彼の『租税貢納論』にては、かかる価値実体としての土地あるいは労働をそのどちらか一方に還元するという問題については解明がなされていないのである。ただ、彼は、「用益権（usus fructus）の自然的価値についてほどうまくはゆかないにしても、永代無条件相続地（Fee Simple of Land）の自然的諸価値を発見しうるならば、われわれはどれほどうれしいであろうか。」[註5]と述べ、「土地の価値」（the value of Land）ないし「永代無条件相続地の自然的価値」（the natural value of the Fee simple of Land）をば、（＝地価を）、資本化された地代として述べているだけである。[註6]しかるに、ペティーは、この価値実体としての土地と労働との還元の問題について、後に執筆した「アイルランドの政治的解剖」において、この問題の解決を試み、経済学における最も重要な問題であるとしたのであるが、[註7]それについてはここでは論じない。ただここでは後述するので、そのことがペティーの後の著作で労働が生産物の価値を決定するという従来の思想に加えて異なった質の労働価値思想を生ぜしめたことを指摘するにとどめる（労働の価格が生産物の「価格」を決定するという思想）。

（註1）　W. Petty, A Treatise of Taxes and Contributions, 1662, chap. IV. 17, Writings, vol. I, p. 44. 大内・松川訳七九頁。

（註2）　W. Petty, ibid., chap. IV. 18, p. 44. 邦訳七九頁。

（註3）　W. Petty, ibid., chap. IV. 18, pp. 44-45. 邦訳七九頁。

（註4）　W. Petty, ibid., chap. IV. 17, p. 44. 邦訳七八頁。

（註5）　W. Petty, ibid., chap. IV, 18, p. 45. 邦訳七九―八〇

頁。

（註6） 彼は年地代に一定の購買年数（years purchase）を乗じたものをもって地価とみなしている。この購買年数として、三世代のもの、すなわち祖父と父と子とが相共に生きうる年数を想定して、当時のイギリスにおいてはこの年数は二十一年であると算定している。なぜなら、人は自分と自分に最も近い子孫の生存する間だけ年地代を買取ることに利害関係をもつからであり、その彼方にあるものはなんら価値を有しないからである。すなわち、ここで土地の価値を資本化された地代とみなしている。しかし、彼は利子を地代から引き出しているから、利子率をあたえられたものとして前提することができなかった（W. Petty, ibid., chap. IV. 19 以下参照）。

（註7） W. Petty, The Political Anatomy of Ireland, 1691, Writing vol. I, p. 181. 松川七郎訳「アイルランドの政治的解剖」一三三頁。「しかもこのことは、諸々の政治経済学（Political Economy）の最も重要な問題、すなわち、あらゆる物の価値を（土地と労働の両者のうち）、いずれか一方のもののみによって表現するために、どのようにして土地と労働との間に同等と平衡の関係（Par and Equation）をつくりあげるか、という問題の考察へと私をみちびくのである。この問題を考察するために、二エーカーの囲いこまれた放牧地を仮定し、その中に一頭の乳離れした小牛を入れるとしよう。そしてこの小牛は、十二ヵ月間に食

用肉が百ポンドだけ重くなると私は仮定する。そうだとすると、このような百ポンドの肉、私はこれを五十日分の食料と想定するが、すなわち、小牛の価値の増分（the interest of the value of the calf）は、この土地の価値あるいは一ヵ年の地代である。しかしもし一人の人の労働が――一年間に右の土地を同一またはなにか他の種類の食物を生産するようにさせうるとすれば、日々の食物のその超過分がその人の賃銀であって、両者は日々の食物の数によって表現されるのである。二・三の人々が他の人々より一層多くたべるであろう、ということは重要ではない。われわれは日々の食物をあらゆる種類と大きさの百人の者が、生き、労働し、そして生殖するために、食べるであろうものの rate と理解するからである。また、ある種の日々の食物が、別種のそれよりも、これを生産するために一層多くの労働を必要とするかもしれないということも重要ではない。われわれは日々の食物を世界中のそれぞれの国々で最も容易に獲得される食物と理解するからである。」

四

しかるに、ペティーは「地代」をもって余剰価値把握に成功する。「ある人が、自分の手で一定面積の土地に穀物を栽培することができるとするならば、すなわち、この土地の耕作に必要なだけ、掘ったり、すいたり、馬鍬でかきならしたり、除草したり、刈り入れたり、家に取り入れたり、打穀したり、そしてふるいわけたりすることができ、しかもその上、この土地に蒔けるだけの種子を持っていたと仮定しよう。この人が自分の収穫物の所収から、自分の種子をさしひき、また同様に自分の食べたもの、および衣類その他の自然的必需品と交換に他人にあたえたものを取りのぞいたとき、なおそこに残る穀物は、その年の間におけるその土地の自然的な・真実の地代（natural and true Rent）であると私はいう。そしてこのような七年間の中数（平均）、否むしろ凶作と豊作とが回転して周期をつくりあげている・いく年かの中数が、穀物であらわされた、その土地の・通常の地代である。」（註1）

彼はこの主張で素朴ではあるが地代の本源を究め、さらに続けて、地代と貨幣との関係を、自然価格論の上に決定している。すなわち、

「しかしさらに副次的な問題ではあるが、この穀物すなわち地代がイングランドの貨幣でどれほどに値するかという問題である。私は答える、それは別の一人の人が、同じ期間中、かりに貨幣の生産・製造に専心従事したとして、自分の費用のほかに貯蓄しえただけの貨幣である、と。すなわち、別の人が、銀の生産される地方におもむき、そこでそれを採掘し、それを精錬し、それを他の人が穀物を栽培しているところにもってくるとしよう、そして同じ人がそれを貨幣に鋳造する等々のことをし、さらにこの人は、銀のために働いている間に、生計に必要な食物を集め、衣服も手に入れる等々をするとしよう。私は言う、一人の人の銀は他の人の穀物と同一価値に評価されねばならない、と。すなわち、一方はおそらく二十オンス、他方は二十ブッシェルであろうが、このことから、この穀物一ブッシェルの価格は銀一オンスであるという結果になるのである。」（註2）

ここで注意しておくべき点は、地主であり資本家であり労働者でもあった自営の農民を想定して論じていたのである。しかもペティーにとっては、地代は種子および耕作者の生活必需品を超える生産物の超過分であり、貨幣地代はこの超過分の自然価格をなす貨幣量なのであるから、彼にあっては、地代は事実上剰余価値であった。ともかく、剰余価値の生産ということを、流通過程においてではなく、生産過程において補足し、人間労働の所産としこれを把らえたが、彼が論証したのは農業生産の場合にかぎられているのである。しかも彼の地代には利潤を含んでいた。利潤は地代から分離されず、ペティーは独立の範疇としての「利潤」概念を形成しなかった。（註3）ペティーの「地代」は土地のうえに生ずる一切の超過余剰、すなわち、狭義の地代に利潤を加えたものの未分化の形態をとったものであった。しかしペティーにおいては、それが不払労働として、また搾取として、不労所得といういみでの剰余価値としてつかまれていなかった。

差額地代についても、「A・スミスよりもうまく差額地代を説明している。」（註4）といわれるように、最初の知識がペティーにおいて見出されている。（註5）

ペティーは地代および地価を叙述してから、利子を地代と密接な関係をもつものとして規定している。彼は利子の本質について、

「われわれが要求しさえすればいつでも確実に取戻せるような、なんらかの物に対して、利子すなわち貨幣賃料(Usury)をなぜやったりとったりするのか、私にはその根拠がわからない。また、貨幣あるいは貨幣で価値づけることができる他の必需品が貸しつけられ、借手はその欲する時期と場所でそれを返却しうるが、貸手はその好む場所と時期にそれを返還してもらえぬ場合に、どうして貨幣賃料をとるのを遠慮しなくてはならないのか、その根拠も私にはわからない。思うにある人が、自分自身どれほど必要を感じても、一定の期限がくるまでは返還を求めないという条件のもとに、自分の貨幣を貸し出したとすれば、かれは自分の意に反してこうむった不便に対して、報償をとっても、けっしてさしつかえなかろう。この料金(allowance)を、普通われわれは貨幣賃料と称するのである。(註6)」

利子の本質をば貨幣の使用抑制に求めているが、彼の真意はむしろそこにあったのではなく、利子を生産部面に還元して考えようとした。地代に利子の標準を求めて「利子の最小可能額は、その安全性について疑問がないところでは、借りた貨幣で買えるだけの土地からあがる地代であると言えよう。しかし、その安全性があやふやなところでは、単純な自然的利子に一種の保険料がおりこまれなければならない。そしてこのことは、利子を——元本以下であろうが(註7)——きわめて正当な程度まで高めるであろう。」

(註1) W. Petty, ibid., chap. IV. 13. p. 48. 邦訳七六—七頁。

(註2) W. Petty, ibid., chap. IV. 14, p. 48. 邦訳七七頁。

(註3) ペティーが生活した時代は、まだ資本と労働の未分化の時代であり、そのいうところの労働は「財のための人間の——自然的に堪えうる幾時間にもわたる——簡単な運動」(The Petty papers, some unpublished Writings of Sir William Petty from the Bowood Papers, Edited by Marquis of Lansdowne, London. 1927. vol. I, p. 211.) であって、利潤を目さすいわば、資本活動と区別されず、その上、これに対立せしめられていない点であり、資本主義的生産方法がまだ十分に発達せず、資本家と労働者の分裂が顕著でなかったためである。いわゆる労働は、資本活動の本質としての企業家活動をも含めたものであった。

(註4) K. Marx, Theorien über den Mehrwert, Dietz Verlag Berlin, 1956, S. 324. 長谷部文雄訳、マルクス「剰余価値学説史」第一分冊、五二四頁。

(註5) W. Petty, ibid., chap. V. 5, p. 48. 邦訳八六頁。

「穀物の必要が大であれば、同様にその価格も昂騰し、その結果、穀物を生む土地の地代を高め、そしてついには土地そのものの価格を高める。たとえば、ロンドンまたはある軍隊を養う穀物が、四十マイル遠方から運ばれてこなければならぬ場合には、ロンドンまたはそういう軍隊の宿営地から一マイル以内に生育する穀物は、その自然価格に、それを三十九マイル運んでくるのに要する費用を加えらるべきであろう。」と、穀物の高価が地代の原因であって、地代が穀物の高価の原因ではないという差額地代の核心を明言している。そこで穀物の価格は、位置の限界費用によってきまるとする。(三十九マイルだけ有利な位置の穀物が、三十九マイル分の運送費だけ、その自然価格につけ加えることにより) すなわち、ペティーにあっては自然価格=価値であり、(生産価格でない) また、労働量とは直接生産に要する労働量のみでなく、市場運搬の労働量をも含むから、三十九マイル分の運送労働量の差が、つまり価値の差が、有利な位置の地代とみなされた。またペティーは「すなわち、人民がおびただしくいる場所、つまり、その住民を養うべき面積の周界が大であるような場所のちかくにある諸々の土地は、右の理由により、遠方の、本質的には同等な土地よりも、一層多くの地代を生ずるばかりでなく、また一層多くの購買年数があるであろう。その場所で土地を所有しているということの快楽と名誉とは、尋常一様のものではないからである。」

(註6) W. Petty, ibid., chap. V. 1, p. 47. 邦訳八三—四頁。

利子の根拠を貨幣使用の抑制に求めている。貨幣使用を待忍することの不便に対する報償(compensation)と料金(allowance)を利子であるとするが、しかしペティーの意味する待忍と犠牲とは、主観的苦痛の度合によって測定されるのではなく、かえって客観的な収入の喪失によって測定されるからである。すなわち、利子は同額の貨幣をもって購買される土地の収入に依存するといわれる。待忍は、たんに微利の公正を弁護するための倫理的口実にすぎないだろう(高木暢哉著、利子学説史、一三八頁)。

なお、貨幣使用の抑制に求めるような利子観は彼の後に書いた『貨幣小論』(Quantulumcunque concerning Money, 1682) においてであるからここではとりあげない。

(註7) W. Petty, ibid., chap. V. 3, p. 48. 邦訳八五頁。

右において、ペティーの労働価値論についての概観を試みたが、更に進んで、彼の労働価値論の性格について掘下げた分析をしてゆこう。(未完)